



TITLE:

平成9年度岩本武和ゼミ・インゼミ 活動報告

AUTHOR(S):

猪俣, 明彦

CITATION:

猪俣, 明彦. 平成9年度岩本武和ゼミ・インゼミ活動報告. 岩本ゼミナール機関誌 1998, 2: 132-135

ISSUE DATE:

1998-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56839>

RIGHT:

平成 10 年 1 月

岩本武和ゼミ インゼミ委員
猪俣 明彦

平成 9 年度岩本武和ゼミ・インゼミ活動報告

はじめに

インゼミは岩本ゼミにとって最大のイベントである、と言っても過言ではない。我々ゼミ委員はゼミ合宿の 9 月からインゼミ本番の 12 月まで、2 回生は神大・同大との合同勉強会、3 回生は関学とのディベートのために多大な労力と時間とコピー代を費してきた。本番で自分達の全ての力を出し切れたかどうかは別として、インゼミを行うことで我々は実に幅広い経験を得ることができたのではないだろうか。そこで、この場を借りてインゼミの具体的な経緯・活動、また思ったこと感じたことを私なりに自由に書かせて頂きたい。

1. インゼミまでの経緯

インゼミを行う上でまず問題になったのが、何をテーマにするか、という問題である。これは、APEC 問題、円の国際化など様々なものが候補に挙がった。が、相手の関学の「欧州通貨統合（以下 EMU）チーム」から電話があったので、「じゃ、EMU でいっか」という『ノリ』で、テーマは EMU に決定してしまった。

次に、どこの大学とインゼミを行うか、という問題。宿敵である関学（鈴木ゼミ）とは行うとして、もう一つのゼミはどこにするか。その第一候補として阪大の阿部ゼミと連絡をとり、「やりましょう」ということになった。そして、関学と阪大とで EMU についてディベートを行い、京大はどちらかは「YES 班」、もう一方は「NO 班」として、京大の中に「YES 班」も「NO 班」も設置しようと試みた。そうすることで互いの班で議論を深めていこう、という壮大なるインゼミ構想が私の頭の中に形成されていた。

しかし、現実はいまぐれいかないものである。阪大の阿部ゼミから「ドタキャン」を喰らい、茫然とする私。そして、神大の藤田ゼミと連絡を取るも神大の意向により、結局ディベートではなく合同勉強会という形となり、神大（藤田ゼミ）・同大（藤原ゼミ）の合同勉強会に京大が参加させてもらうことになった。私のインゼミ構想が理想から崩れ出したのはこの時からなのかもしれない。

まあ、なにはともあれ、インゼミのテーマと相手大学が決定し、ここからインゼミ活動が本格的に始動することになった。

2. インゼミ活動（本番前）

インゼミまでの活動は本格的にはゼミ合宿の9月まで遡る。ゼミ合宿は三重県の賢島で行い、当初は EMU に関する基本書を各自で読み、最後に模擬ディベートを行う、という計画だった。しかし、私の監督の不行き届きで時間を有効に使えず先生や4回生の方々に叱られ、模擬ディベートも内容の噛み合わないものとなってしまい、改めてインゼミの難しさを痛感した。

また、ゼミ合宿が終わって9月から12月にかけてサブゼミを実施するが、中身の緩慢なものになり、レジュメも絶えず内容が変わって模擬ディベートどころではなくなっていた。さらに、関学との意見の不一致が続出してインゼミ活動は混乱を極めた。

そのツケが12月の中旬にまわってきた。EMUに関する諸々の事柄を整理するため、この時期は忙しさのあまり毎日研究室に缶詰状態となった。そうならないようにと比較的早い時期からインゼミ活動を進めてきたのに、と後悔することしきりである。この時には、3回生のみんなにはもちろんのこと、特にTAの高橋さん、次期ゼミ長の藤嶋君には実に御世話になりました。

そして、結局京大側のインゼミ立論は確固たるものにならず模擬ディベートもろくに出来ぬまま、まさに駆け足でインゼミ本番に突入することになった...

3. インゼミ本番

遂に、12月22日と23日にインゼミを実施することになった。

22日の神大・同大の合同勉強会の方は全面的に2回生に担当してもらった。当日は残念ながら私は忙しさのため参列することは出来なかったが、結果はボチボチ、といったところらしい。2回生で経験不足もあったせい、完全には自分達の実力を発揮できなかったようだ。この機会を生かして来年は見事なインゼミを行ってほしい。やれるだけの十分な素質を君達は備えているのだから。

そして23日。関学とはいろいろゴタゴタがあったが、ディベートは実に内容の噛み合うしっかりとしたものとなった。お互いの力はトータルではまさに五分と五分（個別では、京大は清谷に頼り過ぎた）、今まで勉強してきたことをお互いがよく出せていたと思う。

そしてあっという間にインゼミの時間が経過し、終了したときには本当に得もいわれぬような充実感に包まれた。これは実際にインゼミを経験しなければ決して味わえないものであろう。今まで苦しかったけど、インゼミをやってきて本当に良かった。『やった、もう研究室で高橋さんの「天使」原論および各論を聞かなくていい...。』

4. インゼミ結果

インゼミは互いに思うところはあれ、「成功した」と思う。いろいろな問題点・反省点があったが、今後にそれを生かしていきたい。俺達は自分のやってきたことに誇りを持っていいと思う。

23日のディベートには一応の「判決」が出た。結果は「京大側の勝利」となったが、それはあくまで名目的なものに過ぎない。なぜなら関学側はインゼミ活動を自分達だけで行ってきたのに対し、我々京大側はTAの高橋さんに頼るところが大きかった。だから、実質的には「関学側の勝利」と言えるかもしれない。まあ、インゼミの「判決」などどうでもよい、インゼミは「成功」したのだ。

お互いの成果を称えあって、その後のコンパは実に盛り上がった。特に2次会では、今日初めて会った奴等とは到底考えられないほどの異様な一体感が生まれた。岡崎のマーク・パンサー、清谷の布袋、藤嶋のLUNASEAなどはあの場にいた者だけが知る、良き(?)思い出である。

5. 来年のインゼミ委員へ

さて平成9年度のインゼミは終了したが、ここからは来年インゼミ活動を行っていく後輩達に、特に来年のインゼミ委員の人に、自分の経験を踏まえながらインゼミを行う上で考慮すべきことについて書き、平成9年度のインゼミ活動報告を締めくくりたい。

①経済の基礎的・応用的知識をゼミ全体で深めておくこと

インゼミを行うためにはそれ相応の経済的知識が不可欠である。それゆえ、そういった知識をインゼミが始動する前から常に養っておく必要がある。もちろん、インゼミ委員だけではダメである、インゼミはゼミ全体であるのだから。それには是非普段の授業の中身を濃くして、そういった知識がゼミを行う過程で自然に身につけるようにしてほしい。ゼミ長の腕の見せ所である。

②論理的思考能力を高めること

いくら経済的知識を身につけたとしても、それがインゼミで有効に利用できなければ、何の意味も持たない。それゆえ、様々な理論やデータを把握し、それを実際に使えるようにしておかなくてはならない。そのためには論理的思考能力を高める必要がある。だがこの能力は、簡単には身につかないものである。私は自分のこの能力の無さに何度嘆いたか。

③常に相手のインゼミ委員と意志の疎通を深めておくこと

相手のインゼミ委員がどんなに嫌な奴でも、テーマから事細かな点まで常に意見交換をしておかなければならない。そうしないと、最終的にディベートが噛み合わなくなってしまう可能性がある。互いの情報公開についても Fair なものになるように気を配る必要も大いにある。意志の疎通はし過ぎることではない。今回もこれで相手とよくもめた。

④インゼミでのチームワークを確固たるものとし、役割分担をしておくこと
インゼミ委員はインゼミにおいて、ゼミ全員の役割を決め、チームワークを確固たるものにしなければならない。これらを曖昧なものにしておくと、ゼミ全体がまとまりがなく緩慢なものとなり、より進んだ議論が出来ず時間だけが無駄に過ぎていってしまう。我ながら、実に耳が痛い。

⑤独善に陥らぬよう、造詣の深い人に常に助言を求めること

インゼミは学部生だけでやっている、内容に知らず知らずに矛盾した点などが生まれ、その存在に気付かずにいることがしばしばである。それゆえ、ディベートを中身のある濃いものにしたいのであれば、お互いのゼミで TA を設置しその指示を仰ぐことが望ましい。

⑥模擬ディベートを怠らないこと

データの使い方や反論、その切り返しといった、ディベートで実際に必要となってくることは模擬ディベートなどを行わなければ極めて見つかりにくい。それゆえ、実際に模擬ディベートを頻繁に行うことでディベートの流れ、立論の建て方などから細かい点までを知る必要がある。今回はこれをしなかったために多大なダメージを喰らった。

以上の 6 点について、自分のことを棚に上げて述べさせてもらったが、この点に留意し努力を怠らなければ必ずやインゼミは成功するだろう。来年のインゼミが大成功に終わることを頼りない先輩は心から祈っている。

おわりに

いろいろとインゼミについて好き勝手に書かせてもらったが、3 回生のみんな、2 回生のみんな、俺についてきてくれて本当にありがとう。みんながいてくれたからこそインゼミを成功できた。心から感謝しています。そして、岩本先生、TA の高橋さん、柴田さん、たくさんのアドバイスありがとうございます。苦しい時もあったけど、インゼミ委員をやれて本当によかったと思っています。皆さん、本当にありがとうございました。